

「アルゴリズム」「ハードウェア」の三つレベルがあると見た場合 (Marr 1982, Sejnowski & Churchland 1989)、用法依存モデルは、どのレベルの説明を試みているのか、という問題である。どちらかといえば、用法依存モデルを含んだ今日の認知言語学的な言語メカニズムの説明は、脳や心のハードウェア・レベルを想定した上での、断片的な言語現象を対象にした部分的な説明にとどまっている。アルゴリズムや計算理論の総括的な説明やモデル化にはまだいたっていないが、これらの説明レベルを部分的に橋渡しするような、個々の言語メカニズムを深く掘り下げて捉えるという作業の段階にあるといえる。とりわけスキーマから見た言語のメカニズムや諸現象の説明は、その自然の状態で、ヒューリスティックまたは自動処理的な性格を備えていることを明らかにすることができ、より大きなモデル化に向かったの示唆的な原動力ともなっている。

### 3 . 用法依存モデルから見たスキーマの構成と実体化のメカニズム

ここでは、言語の認知過程の中で、ごく単純なインプットないし手掛かりが発生した場合、既存のユニットのネットワークの中から、スキーマがどのように抽出されて実体化する (構成または創発する) のかという点に要点を絞りたい。こうしたスキーマのメカニズムは、用法依存モデルにおいてラネカーが「心理的現象」(Langacker 2000:3-5) と呼んだ五つの基本性格<sup>6</sup>によってすでに図式化が試みられている。

しかしラネカーが挙げた心理的現象は、言語レベルにおけるスキーマのメカニズムの説明に適応されているため、さらにまだ、コネクショニズム・レベルのスキーマの基本性格に還元することが可能と思われる。これらの用法依存モデルによるスキーマの基本性格をその背後にあるコネクショニズム・モデルに関連させてさらに還元した場合、スキーマには次の五つのメカニズムの原理が顕著に働いていると思われる。

#### 3.1. 一 致 性 (concurrency)

- ◆ 言語レベルにおいては、日常的なマッピングのメカニズムとして現れている。すなわち単語認知などにおいて働いている、もっとも単純または初歩的なスキーマのメカニズムとして見ることができる。
- ◆ コネクショニズム・レベルから見た場合、該当する (または関連する) ユニット群の活性化、もしくはスキーマの実体化に相当する。

#### 3.2. 類 似 性 (resemblance) または 共 通 性 (commonality)

- ◆ 用法依存モデルや認知言語学一般でいうところの、抽象化やカテゴリー化のメカニズムに相当する。この中には比較の原理が内在しているとする。
- ◆ 一例に、手掛かり (B) として「イメージのつかめないある物体の名前」あるいは「名前がわからないある物体のイメージ」が与えられた場合を想定してみよう。たとえば、何の (種類の) 鳥かに関する手掛かりが何もなく、鳥のようなイメー